

タイトル	歴史は何の役にたつのか？ : 歴史を学んで 50年, 私の宿題
著者	濱, 忠雄; HAMA, Tadao
引用	北海学園大学人文論集(56): 97-117
発行日	2014-03-31

歴史は何の役にたつのか？

— 歴史を学んで 50 年，私の宿題 —

濱 忠 雄

〈まえおき〉 この小文は、2013 年 12 月 11 日「英米文化研究入門A」の講義に用意したハンドアウトの全部と、これに口頭での補足説明を加えたものです。「講義ノート」を本誌に掲載した前例はないようですが、敢えて投稿したのは、『人文論集』が、研究論文の発表にとどまらず、講義や演習の内容にまで立ち入った自己点検・相互評価、授業改善に向けた切磋琢磨の場となっても良いのではないかと考えたためです。

はじめに

「英米文化研究入門A」は、シラバスに書かれているとおり、「3 年次・4 年次における研究分野、演習所属選択の参考になるように、英米文化学部の教員が各々の専門研究の一端を紹介する授業」ですが、私は 2014 年 3 月末で定年退職となります。また、「ヨーロッパ史」を担当する後任の先生の専門分野は私のとは異なりますので、代わってゼミの内容を紹介することができません。そのため、歴史を学ぶことの意味についてお話しすることで、参考に供することにしました。

北海学園大学では 11 年間ですが、初めて大学教員となった 1975 年から 39 年、文学部史学科で本格的に歴史の勉強を始めた 1964 年から数えるとちょうど 50 年になります。その間に読んだ本や論文から学んだこと、今なお未解決であるために宿題にしていることなどを紹介するかたちでお話しします。

1963～64年

受験勉強から解放されて、大学生に相応しい教養を身に付けたいと考えていた私にとって、良い読書ガイドになったのが「岩波文庫100冊の本」でした。「若い人々のために読書の指標」となるよう「高い識見と豊かな経験をもたれる先生たち」によって選書されたものです。選者は、臼井吉見、大内兵衛、大塚久雄、貝塚茂樹、茅誠司、久野収、桑原武夫、武谷三男、鶴見俊輔、中野重治、中野好夫、松方三郎、丸山眞男、山下肇、渡辺一夫の15名。いずれも戦後の日本を代表する知識人であることを後になって知りましたが、大学1年生の私は「偉い先生たち」といった程度の認識でした。そして、順不同ですが、『ヴェニス商人』『友情』『若きヴェルテルの悩み』『羅生門・鼻・芋粥』『ロウソクの科学』『桜の園』『永久平和の為に』『人形の家』『赤と黒』など古今東西の名作を、毎日、岩見沢=札幌間の往復2時間の通学列車のなかで、なんの一貫性もなく乱読しました。

大学生ならばカール・マルクスやフリードリヒ・エンゲルスの著書も常識として読んでおかななくてはと考えて、「100冊の本」に入っていた『共産党宣言』『空想から科学へ』『賃労働と資本』を読み、その延長で『資本論』にも挑戦しました。1964年、大学2年生の春のことです。向坂逸郎訳の岩波文庫版全12冊を買いました。初刷は1947年ですが、私が買ったのは1962年刊の第23刷でした。15年間で23刷ですから、当時はよく読まれていたことがわかります。周りの学生にも読んでいる人がたくさんいました。

型どおりに第1分冊の第1巻第1篇「商品と貨幣」第1章「商品」から読み始めました。しかし、ひどく難解でした。第1分冊の奥付欄外に「自1964年2月28日至5月13日」のメモ書きがあり、2ヵ月半かかりました。読んだというよりも文字を追ったに過ぎません。第2分冊と第3分冊もパラパラとページを捲るのみでした。

ところが、第4分冊の第7篇「資本の蓄積過程」第24章「いわゆる本源的蓄積」になって俄然分かりやすくなりました。資本と資本制生産様式の前史、農民からの土地収奪、農業革命、キリスト教的植民制度、黒人奴隷

貿易・奴隷制度、公債・重税、商業戦など、総じて「民衆の暴力的収奪過程」が詳述されていますが、高校の世界史で勉強したことも書かれていたために理解できたのです。第4分冊の奥付欄外には「6/1～6/6」のメモ書きがあります。わずか1週間で読み終え、たくさんの棒線と書き込みが残っています。

そのなかで、今も忘れない文章があります。第24章第6節「産業資本家の生成」の最末尾にある「資本は頭から爪先まで、毛穴という毛穴から、血と脂とを滴らしつゝ生まれるのである」（344頁）の一文です。それまで、資本主義はヨーロッパのなかで自生的・牧歌的・平和的に生成し発展してきたのだ、と考えていた私にとっては、まさに「眼から鱗」でした。

少し後のことになりますが、いま引用した文章は、大月書店から出た大内兵衛・細川嘉六監訳の『マルクス・エンゲルス全集』では、「資本は、頭から爪先まで、毛穴という毛穴から、血と汚物を滴らしつゝ生まれてくるのである」となっていることが分かりました。向坂訳で「脂」となっていた箇所が「汚物」と訳されている、その違いに拘って、ドイツ語の原文と英語訳、フランス語訳を調べてみました。すると、ドイツ語の原文は〈das Kapital von Kopf bis Zeh, aus allen Poren, blut-und-schmultztriefend〉、英語訳は〈capital comes dripping from head to foot, from every pore, with blood and dirt〉、フランス語訳は〈le capital vient au monde dégoulinant de sang et de saleté par tous ses pores, de la tête aux pieds〉でした。辞典に書かれている〈Schmulf〉〈dirt〉〈saleté〉の語意からも、本源的蓄積についてのマルクスの筆致からしても、「脂」よりも「汚物」の方が適訳だろうと考えました。また、『全集』版では冒頭の「資本は」の後に読点(,)が入っていますが、これも、この方が良いと考えました。以来、一字一句に拘って調べる、読点の打ち方ひとつにも細心の注意を払うことをモットーにするようになりました。

後から振り返ると、1975年頃に着手シライフワークとなった私のハイチ史研究は、マルクスの言葉を自分自身で検証し確認するものとなったと言ってよいように思います。そして、「資本は、頭から爪先まで、毛穴とい

う毛穴から、血と汚物を滴らしつつ生まれてくるのである」という言葉で総括される性格は、資本の本源的蓄積の段階だけでなく、資本主義の全史にあてはまる、と考えるようになりました。

1964年、2年生の秋に文学部史学科に進んで、成瀬治先生担当の「史学概論」を受講しました。筆記試験の問題は講義の最初に示されていて、「講義をとおして考えたことを書く」というものでした。そこで、講義で紹介された本のうち二冊を読みました。

一冊は、エドワード・ハレット・カー『歴史とは何か』(1961年、清水幾太郎訳、岩波新書、1962年)です。翻訳書刊行50年にあたる2012年には80刷を重ねた名著です。「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのであります」(40頁)の言葉、私の「ヨーロッパ史II」の講義のシラバスに書きましたので記憶している方も多いでしょうか、この名言に感銘し、以来、歴史を学ぶ者として、御多分に洩れず、「座右の銘」としてきました。

もう一冊は、マルク・ブロック『歴史のための弁明——歴史家の仕事』(1941年、讃井鉄男訳、岩波書店、1956年)です。ブロックは「自分の周囲の人間や事物や事件を観察する趣味を持たない博学者は、おそらく、有益な好古家の名には値するだろうが、彼は歴史家という名は断念した方が賢明だろう」(27頁)、「時間の中における人間の学〔つまり歴史学—浜〕は、ただひとつしかなく、それは死せるものの研究と生けるものの研究とを結合することをたえず必要とする」(29頁)と書いていました。ブロックが言いたいことはカーと同じであることを確認しました。

少し補足します。私は講義のタイトルを「歴史は何の役にたつのか」とし、「歴史学は何の役にたつのか」とは表記しませんでした。また、ブロックの本も『歴史のための弁明』であって『歴史学のための弁明』とは翻訳されていません。日本語の「歴史」にあたる英語は history、フランス語は histoire、ドイツ語は Geschichte ですが、そのいずれもが「起こった出来事」(つまり歴史)と「出来事についての研究」(つまり歴史学)の両方の意味を含んでいるのです。「歴史哲学」の用語では、前者は「存在としての

歴史、後者は「ロゴス（言葉、思想、理性）としての歴史」となります。「あなたの専門は何ですか」と問われて、歴史研究者の多くは、「歴史です」と答え、「歴史学です」とは答えません。それは、今お話したように、「歴史」という言葉が「歴史」と「歴史学」の両方の意味を含んでいるからなのです。けっして、歴史研究者に「学」がないからではありません。

さて、『歴史のための弁明』の序文冒頭には「パパ、歴史は何の役にたつの、さあ、僕に説明してちょうだい」という一文があったのですが、最初はさして気にも留めずに読み過ごしました。しかし、「訳者あとがき」でブロックがどんな人物なのかを知って、この言葉にはただならぬ意味があることに気付かされました。— ブロックはユダヤ系のフランス人で（ただしブロック自身は、生まれはユダヤ系だけれども、ユダヤ教徒ではなく、いかなる宗教も実践していない、としています）、ソルボンヌ大学経済学部教授でしたが、1940年6月14日ナチス・ドイツ軍がパリに「無血入城」（ブロックは『奇妙な敗北』という本を書いています）したのを眼前にして、職を擲ってレジスタンスの運動に身を投じました。しかし、ゲシュタポに逮捕され、ドイツが降伏する約1カ月前の1944年6月16日に銃殺されました。享年58歳でした。ブロックは『封建社会』『フランス農村史の基本性格』『王の奇跡』などの著作によって「20世紀最大の歴史家」と評される人物ですが、1941年に書いた『歴史のための弁明』は遺著と言うべきものだったのです。

このことを知るに及んで、「パパ、歴史は何の役にたつの、さあ、僕に説明してちょうだい」という序文冒頭の文は、実は、「自由と民主主義の祖国」がファシズムの軍靴で踏み荒らされた、フランス人が営々と築き上げてきた歴史はなんであったのか、歴史研究は何であったのかを問う、ブロック自身の問いであったことが分かりました。『歴史のための弁明』の副題は「歴史家の仕事」ですが、この本は、歴史家である自分自身の研究のための弁明、その証しにほかならなかったのです。

ブロックが「パパ、歴史は何の役にたつの」という問いに与えた回答は、一言で言えば、薬の効能書きのように示すことはできない、いわば「温故

知新」という息の長い知的営みである、というものでした。

まったく偶然ですが、ちょうどその頃、私は日本中世史家・石母田正著『歴史と民族の発見』（東京大学出版会、1952年）を併読していました。その本のなかに、「マルク・ブロックの死」というエッセイがありました。その最後の最後で石母田さんは、こう書いていました。「マルク・ブロックは立派な、しかし私にとっておそろしい行動をしてくれたのである。歴史家が死ななければならなかった不幸な時代、歴史家も死ぬことができた幸福な時代、このような時代にわれわれも生きているのだということ以外に、何を語り得ようか。マルク・ブロックにしてもそうであったと信じている。」（『石母田正著作集15』岩波書店、1990年、81-82頁）

これを読んで、私は茫然としてしまいました。「歴史家が死ななければならなかった不幸な時代」。これは何となく分かった。しかし、「歴史家も死ぬことができた幸福な時代」とは、どういうことなのか、石母田さんは何を言おうとしているのか分からなかったのです。それで、「歴史は何の役にたつのか」とともに、これを宿題にしようと考えました。大学2年生の私に分からないだけではなく、今もって分からない未解決の難問です。

「史学概論」の筆記試験では、そのようなことを書きましたが、評価は「優」でした。

ところで、今は1964年の話しをしてきましたが、それから45年後の2009年のことに転じます。この年に内田日出海著『物語 ストラスブールの歴史——国家の辺境、ヨーロッパの中核』（中公新書、2009年）を読んでいて初めて知ったのですが、1943年、ブロックはレジスタンスに身を投じる旅立ちにあたって、病弱の妻シモーヌに宛てた『悲しみのバラード』と題する詩を残しました。その一部を引用します。「わが妻よ、ああ、愛すべきわが妻よ／私は今年旅立たねばならないのだろうか／帰還なき遠き旅に／大切な君を独り残して／わが妻よ、ああ、かけがえなきわが妻よ／人が誰でもそれぞれに聞く最期の刻が／私に告げられるとき／愛する妻よ、しっかりと私のもとにいておくれ／愛する妻よ、私が幸せに眠れるように」。この詩を知って、私はまたまた茫然としてしまいました。職を擲ち、

病弱の妻を残してまでして、レジスタンスに身を投じたのです。衝撃という言葉以外に言葉が見つかりません。レジスタンスに身を投じるということは、歴史の研究を少なくとも中断することを意味しますし、先ほどの詩にあったように、ブロックは「帰還なき遠き旅」となり「最期の刻」が来るのを予知していました。生きて再び歴史を研究できなくなることを覚悟していたわけです。

このことは何を意味するのでしょうか。ブロックは第一次と第二次の両世界大戦に出兵し、軍人としても優れた能力を発揮したそうです。歴史の研究をしていても反ファシズムの運動に役立たない、「フランス共和主義の普遍的原理」を守るべくナチズムと闘うには、レジスタンスの兵士となる方が役にたつと考えたのでしょうか。すると、「歴史は何の役にたつのか」という問いはどうなるのでしょうか。そこで再び、前に引用した文が思い起こされます。「自分の周囲の人間や事物や事件を観察する趣味を持たない博学者は、おそらく、有益な好古家の名には値するだろうが、彼は歴史家という名は断念した方が賢明だろう」。ブロックにとっては、「自分の周囲」にある出来事としてのファシズムに向き合い、行動することもまた「歴史家という名」に相応しいことだった、ということなのでしょう。

1975年

1975年は私にとって生涯忘れられない年です。三つあります。一つは、もうすぐ32歳になるこの年の4月、北海道教育大学岩見沢校に講義担当助手として入職し、念願だった研究職と安定した生活費として9万8千円の月給を手にすることができたことです。

二つめは、初めての査読論文である「フランス革命の植民地問題——黒人奴隷制の廃止をめぐる論争」を全国学会誌の『歴史学研究』（419号、1975年4月、青木書店）に掲載できたことです。この論文は、フランス革命が植民地の黒人奴隷制を廃止する経緯を追跡することを主題として、大学院博士課程での6年間の研究を全力を振り絞り精魂込めてまとめたもので

す。その結論は次のようなものでした。——フランス革命の議会は1794年に植民地黒人奴隷制の廃止を決議したが、それは「人権宣言」からの論理必然的な帰結として自動的になされたものではない。1791年夏に始まるフランス領サン=ドマングの黒人奴隷による解放運動の展開が一大転機となった。もし黒人奴隷の蜂起がなかったなら廃止決議はなかった。黒人奴隷制の世界史上最初の廃止は、奴隷制を持ち込んだヨーロッパのイニシアティブによってではなく、ほかならぬ支配と抑圧のもとにおかれた黒人奴隷たちを担い手とする一大民衆革命の所産として実現された。

そして、この結論を踏まえて、論文の最末尾では「つぎに問われるべきは、黒人の解放・独立のための主体がいかに形成されたか、これであろう」と書きました。こうして、その後の私の研究はフランス史からハイチ革命を中心とするハイチ史へとシフトしました。

以来、現在に至るまでの私の研究課題は、日本では研究が皆無だった「知られざる国」ハイチの歴史の細部にまで分け入り、そして、カリブの小国ハイチというローカルな場から出発して、人文主義や啓蒙思想、「人権宣言」などヨーロッパ的〈知〉の意味を問い直す。従来、歴史の客体とされてきた「小国」「弱者」「マイノリティ」に然るべき正当な位置を与える。「世界的横断」による分析や、脱植民地化や普遍的自由の実現といった長期的な「歴史的縦断」による分析をとおして、より等身大に近い近代世界史を構相する。そして、それらをとおして、近代世界史への「書き加え」と「書き直し」を目指すことにあります。

生涯忘れられないことの三つめは、同じ『歴史学研究』の12月号に掲載された阿部謹也さんの論文です。「今日の歴史意識と歴史研究の役割」を特集し10編の論文が収録されていますが、阿部さんは「歴史叙述について」という巻頭論文を書きました(後に、この論文は阿部謹也『歴史と叙述——社会史への道』人文書院、1985年に再録されました)。阿部さんは、歴史学は同じ社会科学の一部門でありながら、経済学や法律学などとは違って、古来、歴史叙述を最終目標として掲げてきたこと、歴史叙述を研究・調査と並んで歴史家の使命としてきたことに特性があるとします。そして、石

田中編著『反原爆＝長崎被爆者の生活史』（未来社、1973年、続編1974年）を取り上げ、こう書きました。

『私たちはすべてヒロシマとナガサキの生存者である』という出発点から戦後30年の日本現代史を貫通しているものであり、それを欠如した歴史叙述は『われわれの経験』に基づくものたりえないということである。敢えていうならば、戦後30年を貫く〈原爆体験〉から戦後の国家史、社会・経済史、そして文化・思想史すらも検討されなければならないと思うのである。……歴史研究と叙述の出発点はここにある。……社会諸科学はそれぞれの分野において人間の尊厳を確かめようとする学問であるということが出来るだろう。その限りにおいて歴史学と経済学・法学との課題に何の違いもない。だが歴史学はとりわけ過去とかかわるものである以上、それは、より直接的である。」(6-8頁) 繰り返します。「歴史学はより直接的に人間の尊厳を確かめようとする学問である」。そうしたうえで、論文の末尾で阿部さんはこう書きました。

「30年前の8月10日の朝、長崎で17歳の少年が死の直前に目を大きく開いて小さな声で『なぜなんですか』とたずねたという。その言葉はすべての生者に向けられているのだが、とりわけそれが容易に答えられない歴史への問いかけである以上、歴史家が真先に答えようとする努力しなければならないであろう。現代の歴史叙述はそれがどの国のどの時代に向けられたものであろうとも、根底にこの問いをひめたものでなければならないであろう。」(8頁)

歴史研究を生涯の生業とすることになった年に読んだ阿部さんの論文は衝撃でした。この論文が書かれた1975年の30年前の長崎で8月10日の朝、つまり1945年8月9日の翌朝、皆さんとほぼ同じ歳の「少年が死の直前に目を大きく開いて小さな声で『なぜなんですか』とたずねた」、この問いかけに皆さんならどう答えますか。1975年の私も今の私にも答えが見つかりません。阿部さん(1935～2006年)はドイツを中心とするヨーロッパ中世史が専門で膨大な著書を遺しました。初期の作品である『ハーメルンの笛吹き男——伝説とその世界』(平凡社、1974年。現在は、ちくま文庫)

を読んで以来、すっかり「阿部ファン」になった私は、主な著書をフォローしてきたつもりですが、阿部さん自身の答えを読んだことがありません。「なぜなんですか」という少年の問いにどう答えるのか、これも私の一生の宿題です。

ここで、いっきに25年後のことになります。2000年に望田幸男・芝井敬司・末川清『新しい史学概論〔新装版〕』(昭和堂)が出版され、この本を教育大学岩見沢校でゼミのテキストにしました。そのなかに、ドイツ三月革命期に登場する自由主義者で、主著『政治学』(1835年)を持つフリードリヒ・クリストフ・ダールマンの言葉が引用されています。「歴史についての知識がいくら豊富に盛りこまれていても、それだけではすぐれた歴史書とはいえない。本当にすぐれた歴史書とは、過去についての知識が、現在を生きるための情熱や思想としっかりと結びつけられているものである」(146頁)。私は常日頃ゼミ生に、高校時代までの「憶える歴史」から「考える歴史」へと脱皮しなくてはならない、と語りかけていたのですが、ダールマンの言葉に触発されて、さらにその先に「生きるための歴史」あるいは「人間として、よりよく生きるための歴史」を目指さなくてはならない、ということを力説するようになりました。

私は、2000年以降だけで2冊の単著書——『カリブからの問い——ハイチ革命と近代世界〔世界歴史選書・国家と地域を問いなおす〕』(岩波書店, 2003年), 『ハイチの栄光と苦難——世界初の黒人共和国の行方〔世界史の扉・地域6〕』(刀水書房, 2007年)——のほか、共著書や研究誌に16編の学術論文を発表しましたが、その研究が「現在を生きるための情熱や思想としっかりと結びつけられているか」を絶えず自問してきました。また同時に、研究をまとめた著書や論文を書く、つまり歴史叙述をするときには、門外漢や初学者でも容易に理解できる簡潔かつ平明な表現に徹しなければならないことも肝に命じてきました。どんなに立派な研究でも読者に理解されなければ何の意味もありません。皆さんが書く卒業研究やレポートも同じことが言えるでしょう。

2003年～

私は2003年に北海学園大学人文学部（Faculty of Humanities）に着任しました。恥ずかしいことに、人文学部開設の理念が「新しい人文学」（New Humanities）あるいは「新人文主義」（New Humanism）であることや、その意味を着任後に初めて知りました。それは、日本文化学科の先生だった大濱徹也先生が「新しき飛翔の場として——『年報 新人文学』刊行によせて」（『年報 新人文学』創刊号、2005年）に書かれた次の文章によつてです。「『新人文主義』は、人間解放の名の下に人間が自然を征服し、人間至上が『近代』の価値であると思ひみなし、人間が欲望のおもむくままに世界を支配することに道を開いた人文主義が墮ちこんだ隘路を凝視し、人間が人間であるとは何かを問い質そうとするものである。」（2頁）

近代ヨーロッパに起源を持つ人文主義（Humanism）を継承しつつ、同時に、その人文主義が墮ちこんだ隘路から脱して、他者や自然と共生しながら、人間のあるべき生き方を追求しようとする「新人文主義」の理念には、ハイチ史を中心とする研究課題からも共鳴し、研究の新たな視座となりました。そして、2011年に担当した「人文科学特別講義」のテーマを「ハイチから『新人文主義』を考える」とし、同じテーマで論文も書きました。

もう一つ、着任後の研究に大きな刺激になったのは、2004年から10年までの7年間、「植民地責任」論をテーマとする研究プロジェクト（代表：永原陽子、当時、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2013年4月から京都大学、南部アフリカ史）に加わったことです。「植民地責任」という耳慣れない言葉は、「戦争責任」や「戦後責任」になぞらえて、植民地主義の過去を克服していくうえで植民地支配を受けた側とそれを行った側との間で明らかにされるべき関係を分析するために着想された新しい概念で、その定義は「他国・他地域の領土・領域を侵犯し、自国領土化し、あるいは自国権益のもとにおき、ないしは自国の経済的勢力圏のもとに組み入れ、それによって植民地住民に甚大な被害を与えたことに対する責任」となります。時間の関係で詳しく説明できません。以下には本橋哲也『ポ

ストコロニアリズム』(岩波新書, 2005年)の文章を載せました。少し長いですが、読んでみてください。

「私自身もそうだが、この本を読んでいただいている読者の多くは、『日本人』であるだろう。『日本人』である私たちには、日本の植民地支配と脱植民地化に対して〈責任〉がある。これは戦前に生きていて戦争責任があること、戦後に生を受けたので戦争の惨禍に直接責任はないが戦後責任があること、その両方を含み得る概念だ。普通日本語で言う責任には、二つの意味合いが含まれていると考えられる。ひとつは『説明責任(accountability)』。これは何かの行動や結果に対してそれに見合った説明を行ったり、対価を支払ったりする義務をさす。もうひとつは『応答責任(responsibility)』。こちらは他者の問いかけに対して答える義務のことだ。

日本人である私たちの植民地に関する責任も、この重なり合う二つの責任の範疇にある。つまり、過去の植民地支配の事実直面して、それがなぜどのようにして起きたのかをできるかぎり正確に知る、という責任。それが自己と他者に対する説明の義務であり、被害に対して補償を行う義務へとつながる。そして、植民地支配や戦争の被害者を含む他者が、そのような過去の事実に関して問いを投げかけてきたときに、可能な限り応答する義務もそこから生じる。

このような過去と現在とをつなぐ責任のありようには、時効がないのではないか。他者からの訴えと要求があるかぎり、私たちは彼ら彼女らに説明し応答し続けなくてはならない。

私たちは忘れても、死者たちは忘れず、その死者たちの祈りによって私たち生者は生き得ているのではないか。(石川逸子『〈日本の戦争〉と詩人たち』影書房, 2004年)

他者の記憶に自己の忘却で答えることはできない。現在の生者は過去の死者の問いかけに自分の言葉で説明し応答する責任がある。私たち自身の現在は、他者の過去の結果なのだ。体験とは過去のある時点での一過性の出来事ではなく、その出来事を反芻し、その後何度も生

き直してきた日々の集積である。そのことに目をつぶったポストコロニアリズムの議論は、いかに理論的な精緻さや資料の豊富さを誇ろうとしても、空しい。」(219-220 頁)

私は本橋さんの論説に賛同します。そして、「植民地責任」を視座とした近代世界史への「書き加え」あるいは「書き直し」を意図しながら、いくつかの論文を書きました。しかし、皆さんのなかには、本橋さんの論説には賛同できない、という人がいるかもしれません。そこで公平を期して、フランスの歴史家パスカル・ブランシャールが『ルモンド』に書いたチャット「植民地化の歴史をどう書くのか」(2005年)からも引用します。「今日の我々は過去に植民地化した人々の“遺伝的”後継者ではないのだから、植民地化したことに許しを請う必要はないのだ。」(Pascal Blanchard, “Chat: comment écrire l’histoire de la colonisation?” <http://www.lemonde.fr/web/chat/0,46-0@2-3226,55-718808@45-1,0.html> [2005/12/09 アクセス])。おそらく、この点は議論のあるところでしょう。皆さんもぜひ考えてみてください。

講義の主題から少し離れたようです。「歴史は何の役にたつのか」に戻ります。

私の学生時代の恩師である遅塚忠躬先生は、病床にありながら逝去(2010年11月13日)の5カ月前に、全500頁に及ぶ渾身の大作『史学概論』(東京大学出版会)を出版しました。たくさん紹介したいのですが、永い歴史研究を振り返って、その意味を問い直そうとした際に挙げた「二つの根源的な疑問」についてだけにします。

「二つの根源的な疑問」の一つは「歴史家の言っていることはどのくらい確かなのか」です。結論を先取りすると、先生は「歴史学はソフトな科学である」とします。「科学 (science, Wissenschaft)」としての歴史学の前提は「論理整合性」と「事実立脚性」にあるけれども、歴史学には他の学問には見られない独特な性格、特性があるとして、以下の点を挙げています。箇条書きにしましたので、見てください。

- ・「歴史学は、その目的 purpose(s)が多様である」「直接の効用を持った

(実用のための) 学問ではない」

- ・「歴史学は、その対象が茫漠としている」「対象範囲(領域 territory)はきわめて広範である」
- ・「歴史学は、一個の学問(科学)でありながら、学問以外の営み(たとえば趣味や芸術やイデオロギー)との境界(boundary, Grenze)がはなはだ曖昧であり、その点でも他の学問とかなり異なっている」
- ・「歴史学は、その研究結果が不確かさを免れないという点でも、他の学問とは大いに異なっている」「正確か不正確かを判定する決め手がない」「追試ができない」
- ・「歴史学は、その方法がきわめて多岐にわたるといっても、他の学問とはかなり異なっている」

教科書に出てくる人名や年代を暗記するだけの学習では、教科書や「歴史家の言っていることはどのくらい確かなのか」などということは考えないでしょう。しかし、遅塚先生が言うように、「歴史学は、その研究結果が不確かさを免れない」のです。そのことは、教科書や著書に書いてあることは本当なのか、なぜそう言えるのかを問うこと、つまり「考える歴史」を促しますし、そこから、一種謎解きのような面白さも生まれてくるに違いありません。

遅塚先生が挙げたもう一つの「根源的な疑問」が「歴史学は何の役に立つのか」です。「歴史学は何の役に立つのか」は、まさに「根源的な疑問」であって、「歴史学に関する最初にして最後の問題である」としているのです。そして、こう書いています。「はじめから人びとが一致して同意できる単一の解答が与えられているわけではないし、だれしものが人間の社会的自己認識の深化というような単一の意義を自覚したうえで歴史学にたずさわっているのでもない。」

この点は、歴史研究の「社会的有用性」をめぐる問題に繋がり、多くの議論のあるところですが、私が読んだなかで、歴史研究の「社会的有用性」をもっとも強調しているのは古代ローマ史が専門の弓削達さんです。弓削さんは、『明日への歴史学——歴史とはどういう学問か』(河出書房新社、

1984年)などの著書で、歴史家は、どの時代、どの地域を研究するのであっても、絶えず自らの研究が社会的に有用であることを目指す責務があるとします。この弓削さんの主張と較べると、歴史研究のいわば「中立性」を強調する遅塚先生の論説は距離があるでしょう。この点は、「社会的」という言葉の意味や内容にも関わる厄介な問題になりますが、これもやはり「歴史は何の役にたつのか」に繋がる「根源的な疑問」です。

さて、先生は『史学概論』の大著を次の言葉で結びました。「歴史学に限らず、おそらく科学一般が、いま、パラダイム〔paradigm。支配的な考え方・理論・認識の枠組み一浜〕の転換を迫られているのではなからうか。歴史学の新たな飛翔を若き世代に期待しつつ、本書をここで閉じることにしよう。」(464頁)

「歴史学はパラダイムの転換を迫られている」という遅塚先生の指摘に賛同します。いくつものことを挙げなくてはなりません、ここでは、2011年3月11日に起った大震災と核災害を挙げます。この悲劇は、私たちの生き方そのものに、科学一般に、そして歴史学にもパラダイムの転換を迫っていると考えるからです。遅塚先生は2010年11月に亡くなりましたから、「3月11日」を目撃していません。もし目撃していたらどのように仰ったか知りたいところです。私は、「憶える歴史」から「考える歴史」へと脱皮し、さらにその先に「人間として、よりよく生きるための歴史」を目指さなくてはならないとしてきましたが、2011年3月11日を境として、「人間として、普通に、ごく当たり前に生きるための歴史」という言葉に代えることにしました。それは、阿部謹也さんが言うような「より直接的に人間の尊厳を確かめようとする学問である」歴史学の根幹に、そして、他者や自然と共生しながら人間のあるべき生き方を追求しようとする「新人文主義」の視座ともリンクすることになるでしょう。

おわりに

今から2代前のローマ法王、ヨハネ・パウロ2世（在位1978～2005年）

は1992年2月に西アフリカ、セネガル沖のグレ島を訪れました。グレ島はかつて大西洋黒人奴隷貿易の一大基地だったところです。その奴隷要塞に立って、彼は「奴隷貿易に従事したキリスト教国家とキリスト教徒に神の許しを乞う」と表明しました。西山俊彦さんが『カトリック教会と奴隷貿易』（サンパウロ、2005年）で詳細に論じていますが、カトリック教会は、プロテスタント教会も同じですが、世俗の権力と一緒にあって、黒人奴隷貿易——「ヨーロッパ史Ⅱ」や「英米文化講読Ⅱ」を受講した方はスティーヴン・スピルバーグ監督の映画『アミスタッド』に描かれた奴隷貿易船内の様子を思いだして欲しいのですが、アフリカから南北アメリカ・カリブ海地域へと向かう大西洋横断に平均2ヵ月を要した「中間航路」での筆舌に尽くし難い「地獄図」が300年以上にもわたって続き、1200万人とも1300万人とも推定されるアフリカ人が南北アメリカ・カリブ海地域に強制的・暴力的に連行された——あの黒人奴隷貿易を推し進めた共犯者でした。このことに対する「遺憾の意」をヨハネ・パウロ2世がカトリック教会として初めて公式に表明したのです。黒人奴隷貿易が始まってからおよそ500年後のことです。西山さんの本は日本では類書のない画期的な研究で、私も大いに勉強になったのですが、その西山さんは、実は、カトリックの司祭に叙階されている方なのです。神に仕えるキリスト者としての己の信仰を問い直すべく、カトリック教会の過去の罪責を真正面から検証した西山さんに、私は最大限の敬意を表します。

少し遡りますが、ヨハネ・パウロ2世は1981年2月に広島を訪れ、「平和アピール」を発表しました。そのなかでこう語りました。「戦争は人間の仕業です。戦争は人間の生命を奪います。戦争は死そのものです。過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことです。ヒロシマを考えることは、核戦争を拒否することです。ヒロシマを考えることは、平和に対しての責任を取ることです」。繰り返します。「過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことです」。この言葉は、歴史を学ぶ意味の核心を衝いているでしょう。逆に言えば、「将来に対する責任を担うことは、過去を振り返ることです」となります。それは、エドワード・ハレット・カーが「歴

史とは現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのであります」と書き、マルク・ブロックが「歴史学は死せるものの研究と生けるものの研究とを結合することをたえず必要とする」と書き、フリードリヒ・クリストフ・ダールマンが「すぐれた歴史書とは、過去についての知識が、現在を生きるための情熱や思想としっかりと結びつけられているものである」と書いていたのと同じです。

ここで「過去を振り返る」と言うときの過去とは、黒人奴隷貿易のような人権侵害や戦争、支配、抑圧、隷従、差別などのような、「平和学」では普通「構造的暴力」という用語で総括される出来事だけを言うのではありません。そのような「構造的暴力」に対して異議申し立てをした人々、歴史に名を残している著名な人物だけでなく、数多の名もなき人々の勇氣ある行動や英知、思想、文化などが、そして人間の営みのすべてが含まれるのは言うまでもないことでしょう。

過去は、過去ゆえに問題となるのではなく、現在にとっての意味のゆえに問題となるのであり、また、現在は、孤立した現在においてではなく、過去と誠実に向き合うことをとおして明らかになるのです。ですから過去は、時が経つにつれて、その姿を新しくし、その意味を変えていくことになります。

「歴史は何の役にたつのか」について単刀直入の回答を与えたわけではありませんし、また、ひどく重たい話が多くなりましたので、歴史を学ぶことを敬遠したくなった人もいるのではないかと危惧しますが、歴史家の多くが、そして私自身が考えてきたことをお話ししました。「歴史は何の役にたつのか」の問いは、「言語や文学は何の役にたつのか」「思想は何の役にたつのか」など、総じて「人文（科）学は何の役にたつのか」と問うことを促すでしょう。

清新かつ鋭敏な知性をもって過去と「対話」し、「人間として、普通に、ごく当たり前生きるための歴史」を構築する営為を、皆さんのような若い世代に託したいと思います。

濱担当分のレポート課題は次のとおりです。

必修課題：あなたは「歴史は何の役にたつ」と考えますか。1000字程度で書いてください。

*「何の役にもたたない」と論じるのも結構です。なぜそう言えるかを自由に述べてください。

選択課題：次の二つのうち一つを選択して、1000字程度で書いてください。

① 本橋哲也『ポストコロニアリズム』の論説について、考えたことを書いてください。

*「本橋哲也の論説に賛成できない」と論じるのも結構です。なぜ賛成できないかを自由に述べてください。

② 長崎の少年の「なぜなんですか」という問いに、あなたならどのように答えますか。

*難しい設問でしょうが、考えてみてください。私には「正答」がありません。あなたの「答え」を聞かせてください。

講義では、上のハンドアウトを黙読(約35分)してもらった後、以下の諸点を口頭で補足説明しました。

① 「資本の本源的蓄積」のドイツ語は〈ursprüngliche Akkumulation des Kapitals〉、英語は〈primitive accumulation of capital〉です。「本源的蓄積」ではなく「原始的蓄積」と翻訳して「原蓄」と略すこともあります。

「資本の本源的蓄積」とは、簡潔に説明すると、封建社会が解体して資本制社会が成立する過程における生産様式の変化のことを言います。資本制社会が成立するためには、商品経済が成立するための商品生産の存在が必要となる。そして、それが成立するためには、一方には生産手段と労働力を購入して剰余価値を搾取する資本家の存在と、もう一方には労働力を売ることができる(あるいは労働力を売ることしかできない)労働者(プロレタリアート)の存在が必要です。封建社会の解体をとお

して、この、資本家と労働者の二つの階級を創りだされました。そのような過程を示す典型的な例は、高校の教科書に出てくる「囲い込み」です。イギリスでは農民が「囲い込み」によって土地から追い出された、そのため、土地という生産手段を失った農民は都市部に出て、資本家に雇われて賃金労働者となった。こうして、資本主義的生産の基礎が築かれました。資本主義的生産は、普通、産業革命によって完成されるとされますが、「資本の本源的蓄積」の段階は、その準備段階のことです。

関連して、「資本は、頭から爪先まで、毛穴という毛穴から、血と汚物を滴らしつつ生まれてくるのである」の文にある「毛穴という毛穴から」の日本語訳にも注目してください。ドイツ語の原文や英語訳、フランス語訳からは、多くの人は「すべての毛穴」とか「あらゆる毛穴」と訳すでしょうが、向坂訳でも『マルエン全集』版でも「毛穴という毛穴から」と訳されている。実に巧みな翻訳ですね。私は鳥肌が立ちました。このような見事な翻訳ができるには、外国語力だけでなく日本語力がいかに大切かを教えてくれます。

- ② 内田日出海著『物語 ストラスブールの歴史——国家の辺境, ヨーロッパの中核』は、たいへん興味深い本です。ストラスブールはフランス語表記ですが、ドイツ語ではシュトラスブルクです。ストラスブールはライン川沿いの都市で、アルザス（ドイツ語ではエルザス）地方にあります。高校で世界史を勉強した人は「アルザス・ロレーヌ」という言葉を思い出すでしょう。フランス領になったりドイツ領になったりしたところで、独仏間の戦争や外交関係のあり方によって帰属が変転し翻弄されました。ですから「国家の辺境」という副題がついているわけです。一方、「ヨーロッパの中核」という副題は、現在のストラスブールには欧州評議会や欧州人権裁判所のほか EU（ヨーロッパ共同体。本部はベルギーのブリュッセル）の欧州議会の本会議場があるなど、重要な役割を果たしていることによります。かつては「国家の辺境」と見なされたのが今では「ヨーロッパの中核」になっているわけです。

ストラスブールという一都市が辿った歴史から独仏関係やヨーロッパ

史の全体を鳥瞰するこの本はたいへん面白いですね。このような手法は、たとえば、「ヨーロッパ史II」で紹介し、「基礎演習」での「参考書」にした川北稔の『砂糖の世界史』（岩波ジュニア新書、1996年）——茶や綿織物とならぶ「世界商品」だった砂糖という一つのモノに焦点をあてて、近代世界史をダイナミックに描いた本——の手法と似ていますし、ハイチというローカルな場に焦点を当てて、そこから出発してより等身大に近い近代世界史を構想しようとする私の手法とも共通するものです。歴史の研究には多様な方法がありますが、私自身は、全体から個別の事象を俯瞰する方法よりも、逆に、個別の事象から全体へと進むアプローチ、それも、その事象を同時代の世界的な脈絡と関連させる「世界的横断」とともに、長期的な歴史の流れを視野に入れた「歴史的縦断」を加味した手法に魅力を感じています。

ところで、内田日出海さんの本にマルク・ブロックの名前が出てくるのは、ブロックが1919年から36年までストラスブール大学で教鞭をとったことがあるからです。ストラスブール大学は第1大学（医学・自然科学系）と第2大学（人文・神学系）、第3大学（法・政治学系）から成りますが、それぞれにストラスブールにゆかりの人名を付けています。第1大学には化学者・細菌学者でワクチンを発明したルイ・パウトゥール、第3大学には作曲家のロベール・シューマン、そして第2大学がマルク・ブロックです。第2大学がマルク・ブロック大学となったのは1998年のことですが、その決定は難航したそうです。なぜか。ブロックがユダヤ系の出自だったことを理由に反対した人が少なくなかったからでした。ハンドアウトに書いたように、ブロック自身は「生まれはユダヤ系だけれども、ユダヤ教徒ではなく、いかなる宗教も実践していない」としていたにもかかわらずです。このことは、20世紀の末になっても、なお、反ユダヤ（anti-semitism）の感情が払拭されていないことを象徴的に示しているでしょう。

- ③ フランスの歴史家パスカル・ブランシャールが『ルモンド』に書いたチャットに関する記述の部分を見てください。これはインターネットで

検索して得られた情報なので、<http://www.lemonde.fr/web/chat/0,46-0@2-3226,55-718808@45-1,0.html>[2005/12/09 アクセス]のように、URLと検索した年月日を書きました。これはルールですから、憶えてください。

- ④ 遅塚先生の本に触れたところに出てくる「歴史はなんの役に立つのか」の文では「立つ」と漢字で書かれている。私の文章では「たつ」とひらがなで書いているので不統一ですが、これは、原文に忠実に引用しなければならないルールがあるからです。たとえ原文に誤記があっても勝手に変えてはいけません。誤記の部分には「ママ」とルビを付けます。これも、レポートや卒業研究を書くときの作法として記憶するといいでしょう。
- ⑤ 補足説明の最後は「構造的暴力」という用語です。これは、ノルウェーのオスロに生まれ、平和研究の創始者の一人とされるヨハン・ガルトゥングが1970年代に使い始めたものです。簡潔に説明すると、こうです。普通、「平和」の反対語は「戦争」で、peace=warlessnessとされます。しかし、戦争状態がない場合であっても、「平和」とは言えないことがあります。戦争状態だけでなく、支配や抑圧、隷従、差別あるいは貧困や飢餓の下におかれた人々は、肉体的にも精神的にも平穏な生活を脅かされている、「平和」とは言えない、peacelessnessの状態であると言える。そのため、それらすべてを「構造的暴力 structural violence」と総称して、「平和」の反対語とするのです。「構造的暴力」の用語は、今では、「平和研究」「平和学」だけでなく、社会科学の用語として定着しています。